



### 学童疎開の夏

### 第59号

△ピース・シーズ▽  
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学、高校生の25人が自らテーマを考え、取材し執筆しています。

皆さんは夏休みを、どのようにして過ごしていますか。家族や友だちとレジャーを楽しむ人も多いでしょう。しかし、戦争中の子供たちは違います。  
太平洋戦争が激しくなり、空襲が続くと、被害を少なくするために児童の多くが親元から離れ、田舎の親族の家や寺などへ移されました。これを「学童疎開」と言います。  
中国新聞ジュニアライターは当時仁保国民学校（現仁保小、広島市南区）の3年生だった時に、上水内村（今の広島市佐伯区湯来町）へと集団疎開した3人から体験を聞き取り、寂しさを募らせた当時の記憶に向き合いました。

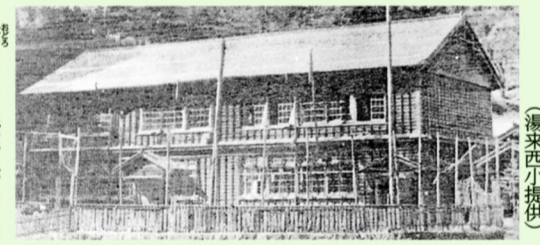
## 親元離れ寂しい日々

### イチヨウ囲み友と涙 太尾田さん



分校跡に残るイチヨウの前で、泣いた日々を振り返る太尾田さん

セミの音が響く広島市佐伯区湯来町の打尾谷集落。雨の日は、農作業を休む近くの民家に行くのが楽しみで、おはぎをもらって隠れて食べました。  
家が恋しくて、たまらぬ場所には、太尾田さんが生活しながら学んだ上水内国民学校（現湯来西小）の分校がありました。  
1945年5月に集団疎開しました。農家だった実家と比べられないほど食事が少なく、蒸した小さなジャガイモが一つだけの時も、少しも大きなイモが欲しく、友だちと席を取り合いました。「まるでいす取りゲーム」と悲しそうに例えます。  
男の子が捕まえて焼いたへじ、苦い雑草……。おなか



上水内国民学校の打尾谷分校（湯来西小提供）



下川さん（右端）が疎開した大福寺の本堂で、当時の子どもたちの生活に思いをはせるジュニアライターたち。寺に寝泊まりした児童約30人は毎晩、お経を読んでいた（撮影・高2川岸言統）



### 原爆の光・音 疎開先届く 下川さん

1945年8月6日に広島へ落とされた原爆の閃光と爆音は、上水内村に疎開した児童にまわりました。そして「ドン」という音のかかりません。授業が終わって帰る途中、真っ黒に変わった空から、新聞紙などの燃えかすが落ちてきました。  
隣の分校へ登校した。太陽は真っ赤に見えました。しようし寺の石段を下りていた時、「ピカッ」と周りが光り出して寝込んだという下川さん。心配して訪ねてきた母と会い、仁保が焼かされた。原爆は怖いものではない、怖いものは考えられない。二度とあつてはいけない。  
菅沢地区の大福寺で過ごしています。（中3 風呂橋由里）

### 証言を聞く

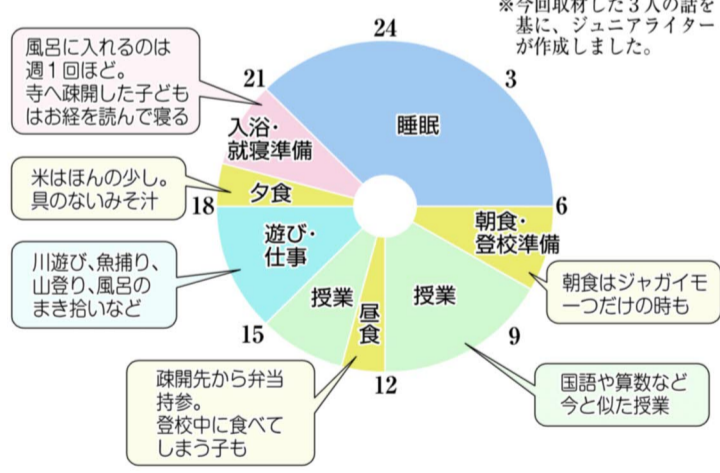
### 夜の静けさ 心に染みだ



正円寺に立ち寄り、疎開生活の寂しさを話す小谷さん

小谷武さん82は、上水内国民学校の本校に通いながら、近くの正円寺で寝泊まりして、そう思い出します。「暑くて眠れない夜もあった。1945年6月中旬、疎開した。佐伯郡上水内村小谷武行「正圓寺」と書いています。「親も自分も寂しかった。この悲しみを忘れたい」と話します。（中3 森本柚衣）

### 上水内村へ疎開した児童の平均的な一日



### 学童疎開って？

学童疎開の対象になったのは、国民学校（現在の小学校）3～6年生でした。政府が1944年に決め、東京都など都市部で開始し、翌45年には広島市や呉市へも広がりました。  
親族を頼って地方へ行く縁故疎開を含めて、広島市では、全児童の6割を超える約2万5千人が疎開したとされます。広島県の間部などへ向かいました。  
広島市内にとどまった児童の多くは、原爆に遭います。疎開した子どもたちは原爆からは助かりましたが、家に戻ろうとしても家や家族を原爆で失い、孤児になった子も相次ぎました。